（第三種郵便物認可）　7/12/2016　房日

連載

モントレー湾地域の人々⑤

館山　太田　義夫

モントレーの人々①
小谷仲治郎とA・M・アレンの妻サイティ

小谷源之助の弟、小谷仲治郎は明治5年（1872）、安房郡白浜に生まれた。明治23年に大日本水産会伝習所（東京海洋大学の前身）に入学、1年半の修業期間を終え20歳で卒業した。2年後、22歳の時に安房郡千倉の平野平右エ門の養子となり、長女みわと結婚した。26歳の時に渡米、先着していた兄源之助やA・M・アレンとともにポイントロバスで潜水漁業・缶詰製造を始めた。A・M・アレンは小谷源之助の協力者である。

2人が出会った時、アレンは土地と財産を持っていた。源之助は財産を持っていなかったが、アワビについては知っていた。アレンは土地と財産を提供し源之助の事業を支援した。アレンの妻はサイティ・モーガン、3人の娘はマーガレット、ヘレン、ユーニスである。

10年間をアメリカで過ごした後、仲治郎は明治40年に帰国し、昭和18年に亡くなるまでの36年間を千倉で過ごした。その間、千田漁業組合長、村会議員、七浦小学校学務委員などを歴任した。帰国した年にアメリカから、アレンの妻サイティの死を伝える報が仲治郎の元に届く。

サイティは夫アレンと共にポイントロバスに住み、3人の娘を育てながら源之助の事業に全面的に協力していた。缶詰工場で製造していたアワビ缶詰のラベルには、サイティが考案したアワビのレシピが書かれている。アワビを食べなかったアメリカ人の食生活を変えようというサイティの努力である。サイティは1906年、旅行中のサンフランシスコで大地震に遭い療養していたが、1907年3月、41歳で亡くなった。

サンフランシスコ大地震は4月18日早朝にサンフランシスコ周辺を襲ったマグニチュード7・8の地震である。地震とその後の火災は、アメリカ合衆国の歴史の中で最も被害の大きい自然災害のひとつだった。市内では十分な耐震強度を備えていなかった建造物の多くが倒壊し、50か所以上で火災が発生した。水道管が破損したため満足に消火活動ができず火災は3日間燃え続けた。

仲治郎はサイティの死を悼み、平野家の菩提寺である千田長性寺の住職、高梨盛真に相談し、自分が発起人となって追悼法要を行うこととする。高梨住職は同じ真言宗の隣寺である千田照明院と観養院の住職に依頼し法要を行った。

写真①は法要当日のものである。正面に「Prayers Meeting for Blessing upon Late Mrs. A.M.Allen」（故アレキサンダー・マクミラン・アレン夫人追悼法要）と書かれた文字が見える。仲治郎はアメリカで亡くなったアメリカ人の追悼法要を日本で行った。本来ならば法要はアメリカで行わなければならなかったが、行くことが叶わずサイティの位牌を作り法要を行った。

写真正面に位牌が見える。仲治郎だけでなく既に帰国していた漁師たちにとっても、サイティは大切な人であった。写真前列左が小谷仲治郎、右が俳優、早川雪洲の兄、音次郎である。仲治郎は法要が行われたことを写真を添えてアメリカに送った。「法要」を英語で表記して写真に撮りアメリカに送ったことに、日本の人々の気持ちをアレンと関係者に伝えようとする仲治郎の意思が読み取れる。

長性寺は真言宗の寺である。本尊は不動明王、創建は治承元年（1177）である。無住の時代が続いたが、明治29年、高梨盛真が現在の基礎を築いた。

小谷仲治郎がサイティの法要を行った23年後、昭和5年にアレンが亡くなった。70歳だった。この知らせを受けた小谷仲治郎は再び長性寺の高梨住職と関係者に諮り、追悼法要を営んだ。写真②が法要当日のものである。住職は長性寺・高梨盛真の他、大聖院・御子神太範、照明院・前田宥俊、観養院・鈴木盛鏡の4人、前列右が小谷仲治郎である。「The Memorial Service for Late Mr. A. M. Allen」（A・M・アレン追悼法要）の文字が見える。彼はこの写真もアメリカに送り、追悼法要を行ったことを報告した。

この写真の人たちはアメリカ講のメンバーでもある。アメリカ講は氏神様である高皇産霊神社の祭日に当たる毎月8日に、渡米者宅持ち回りで留守宅を預かる女性が集まり、男達の在米中の安全と無事の帰国を祈願していた。ここには既に帰国していた千田7人、平磯3人の漁師も写っている。

（引用＝「サンフランシスコ大地震」ウィキペディア、崙書房「房総の潜水器漁業史」大場俊雄著）

（つづく、元県立安房博物館研究員）

①サイティ・モーガン追悼法要

②A・M・アレン追悼法要